

『琅』二十三号への手紙

ようやく秋らしくなってきました。
「琅二三号」いただきました。有り難うございます。体調芳しからずと伺っておりますので、案じていたところです。安心しました。

「二言、三言、世迷い言(十)」早速拝見。「みっちゃん」のことは、ああ、あの話だなと気がつきました。「演歌つれづれを開いてみるまでもなく、「みっちゃん」の面影が彷彿とするOさんとの出会い、交友に心温まり、羨ましくも思いました。

男は、いくら年齢を重ねても過去と離れられないものらしく、私にも「もう一度逢いたい」人たちがいるのですけれど、しかし脳裡に鮮明なのは若く、瑞々しく華やかな面影でして、逢って幻滅(お互いさまですが)を覚えるよりも、美しい思い出のま

まの方が・・・と、自分を納得させております。Oさんのような女性が現れないものか、念じている次第です。

それにしても当時から、「みっちゃん」とのいきさつを聞いてくれ、現在もそのことを受け容れてくれている奥様の、おらかな人柄に感嘆いたしました。蛇足ながら、私の妻の愛称も、みっちゃん(光子)でした。

宗内数雄氏「私の選句」この直前に読み終えました。

「あとがき」での 成島俊司へのお言葉、ありがとうございます。

ご迷惑を顧みず、同人誌「せんだんお手元まで。代表の清水保野 九三歳。ここ三年ほどに心筋梗塞、帯状疱疹、脳梗塞と入院を繰り返しておりますが、不死鳥のごとく蘇り、いまでも意気軒高、やる気満々です。私ごときがトシなどととても言えません。

ご自愛のほどを。

十月二一日 訝文学会 依田茂夫

会いと別れが多いのですが、ともするとそんな日々流されそうになる弱さも感じています。

先日、八王子の工学院大学に所用があり行きました。八王子に降り立つと、先生が懐かしく恋しくなる私です。秋ですね。先生の昔語りと味わいある歌声をお聞きしたい、そんな気分の今日この頃です。

十月二六日 加藤鐵子

加藤さんへの返信

相変わらずの鉄子さん、いや、鐵子さんですね。福祉社会真つ盛りの時代の尖端をまつしぐら……。今年人生二回目の入院をしましたが、医療・看護・福祉について、しみじみ考えました。そういう職業についてはいけない人、そういう仕事だからこそついてほしい人、つくづく見えってきました。あなたのような方が、リーダーシップを発揮してこそ、時代も変わるかなあ、と思いました。

掲示板、あまり訪問者もないので、そろそろ締めようかと考えていましたが、本当によかったです。『琅』次号に、この便り、『琅への手紙』に掲載させていただきます。お手紙で返信が来ると、

<『琅』への手紙>

宗内敦 様

拝復『琅』二三号と短信をありがとうございます。読んでみました。「二言・三言・世迷い言」を読みながら貴殿はもてるのだなと思ひました。パーのマダムとみっちゃんとOさんと元同僚の奥さんとー以上四人の女の人がこれだけ短い文章の中にそれぞれの資格で登場するのは圧巻です。男たるものかうありたいと小生も思ひますけれど実際にはなかなかどうして、アハハ……。 妄言當死

十月二五日 和田正美

宗内敦先生

すっかりご無沙汰してしまいました。『琅』二三号を受け取りながら、お礼が遅れて失礼いたしました。拝読させていただきました、先生が変わりなく心身お健やかに過ごしておられるご様子で、嬉しく思っています。久々に『演歌つれづれ』を読み返してみようかしら……。

当方はといえば、先生が「みっちゃん」に出会った街での暮らしは、すっかり落ち着いております。仕事では、相変わらず出

掲載したいなあと思っても、入力するのが大変で、ついやめてしまいます。みなさんがこの掲示板やメールでどしどしお返事を呉れるとありがたいんですけれど……。

何はともあれ、久しぶりに心ときめくお便り、有り難うございました。病氣も吹っ飛び、若返ります。(宗内敦)

宗内敦先生

『琅』二三号とお手紙を拝見いたしました。宗内先生のあたたかいお心遣いにいつも感謝いたします。お手紙は何度も何度も読み返しては、幸せな気分浸っております。

驚岳さんの若さをおっしゃっていましたが、先生だつてまだまだお若いのです！そして、いろいろなこと挑戦なさっているようにお見受けいたします。CPTの御本もいよいよ完成なのでですね。さらに家庭果樹園の御本もいつの日にか……。子育て奮闘中の私にとつて、楽しみがどんどん増えていきます。先生がお元気で御活躍ですと、とてもうれしくなります。

今回は先生のお兄様のお話も拝読できま

して、久しぶりに「宗内数雄青春句集」を開きたい気持ちになり、実家に行きました。また、松村先生のお名前も拝見しまして、わくわくしながら小説を読ませていただきました。

「逢いにゆきたし、傘はなし……」いとも自然に後を続けられた奥様、なんて美しいハーモニーなのでしょう。先生のようなすてきなご夫婦、そしてご家族に学生の頃から憧れておりました。私どもの夫婦は言葉にしてもなお、まだまだ伝わらないもどかしさがあります。これから、少しずつ積み上げていくものなのでしょうね。

若い頃は、思い出しは胸が疼くような失恋を数多くしてきました。結婚後も思い返すと胸がチクチクしたのですが、子どもを産み日々成長していく喜びの中で、「あの失恋があったからこそ、この子に会えたんだ」と思えるようになりました。今では、笑って話せる思い出です。

文中に書かれてありました「教える子に対する父性愛」、胸が熱くなりました。先生にはどれだけの愛をいただいたことでしょ

う。そして今も…。バリバリ働いているかつての同級生を見ると「もしあの時、大学を再受験していなかったら、今頃はどんな人生だったのだろう」と思うことがありません。ですがそれをまったく後悔していないのは、都留大に入学し、先生との出会いがあったからです。先生の御指導が受けられたからです。「宗内先生の教え子である」ということは私の誇りであり、宝物です。先生にどれほどかわいがっていただいたことか。出入りの自由を許可してください。たあの研究室で、お湯を沸かしコーヒを淹れながら、ゼミ生みんなで今か今かと先生をお待ちしていたこと、昼食やケーキ、アイスなどを毎日のように「おねだり」したこと、赤羽さんと一緒に果樹園の桃狩りに呼んでいただいたこと、学会発表で京都のとてもおいしいご馳走をいただいたことすべてがキラキラと輝いて胸の中にあります。あれから十五年も経つんですね。全色あせていないのです。

出産してから、時々先生の「発達臨床心理学」を読んでいます。心理学の学生だっ

た頃は新しい知識として興味深く学んだのですが、子育て中の母親となった今、実務的な知恵として大変役に立っており、発達段階ごとに「なるほどなあ」と助けられています。子どもを育てるということは、心理学者・教育学者・医者・役者士、たくさんさんの役割を演じることなのだとこのことを、しみじみ実感しております。

子どもを寝かしつけた後が唯一の「自分の時間」ですが、毎日『琅』を少しずつ拝読するのが、最近の楽しみでした。充実した幸せなひとときを有り難うございました。ただ、掲示板や『琅』のあとがきを拝見しますと、先生のお身体が心配でなりません。また、今年は記録的な猛暑でしたので暑さが苦手であらうしやる先生のことがとても気がかりでした。

今はリハビリをなさっているようですが、お忙しい先生のことですから、焦るお気持ちもおありになると思います。どうぞ、無理をなさらず、時にはゆっくりとした時間をお持ちくださいね。

秋を堪能する間もなく、一気にと冬が来て

めどきとは思っています。お元気で。

不 尽

十月二十八日 鷺江雄

宗内先生

『琅』二三号を有り難うございました。医療ミスによる脳梗塞とので心配しております。そうした災難にあつても、『琅』はもとより、CPTを完成させられる先生の強靱な体力・精神力には感嘆させられます。老齢に入ってきております私にとって、いつも大きな勇気と励ましをいただいております。

今回の『琅』も、とても楽しく読ませていただきました。「二言・三言」は本当に好きです。寅さんよりも小沢昭一よりも、純粹で、豊かで、より美しい世界だと思います。昭和世代の一人として共感することしきりです。お兄さんの俳句の世界も新鮮でした。謙虚な表現ですが、選者としての確かな力量が自然に伝わってきました。ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

十一月八日 保坂三雄

宗内 敦 様

『琅』二十三号、十月十九日に届きました。体調がすぐれなかったと伺っておりましたが、編集作業が大変だったことと思えます。

私の眼の病気、ご心配いただきましたが、手術後はお陰様でだんだん視力が回復してきました。完全に戻るには数ヶ月かかるということですが、

じつは、三年ほど前から物が歪んで見えるようになり、視力も落ちてきたので、昨年、近くの眼科で診察してもらったところ、「黄斑変性症」と診断され、「網膜が痛んでいるので手術が必要です。手術は早いほうがいいですよ」と言われました。網膜の手術と言われて怖くなり、「手術するくらいならこのまま見えなくてもいいや」と思うことになりました。

しかし、視力はますます衰えて、左右の眼の焦点が合わず、新聞など片眼つぶって読むようになる始末。ちょうど高血圧の治療で虎の門病院の内科に通うようになって

しまったような感じですが、くれぐれもご自愛くださいませ。

乱筆乱文、大変失礼いたしました。

平成二十二年十一月十日 蓬田澄子

宗内敦様

『琅』二三号ご惠贈ありがとうございます。いつもながら楽しく拝見しております。大久保さんの旅人論、身にしみますね。浦野さんのくいつでもトイレは戸井十月のNHK<3万キロのバイク旅>を見たので、さもありなんと納得が行きました。尊兄の《世迷い言》はせつない「初恋」を聞かされてハイフをしぼられる思いでした。それにしてもかくもあけっぴろげにアツケラカント《告白》される私小説魂にはシャッポをぬぎました。お見事。松村さんの《パークとウィルズ》の物語は圧巻で、ラストの夜更けの大通りでの残吹雪舞う大行進は作品を一挙に、鮮やかに、すみずみまで盛り上げて驚かせました。あざやかなだまし絵ですね。小生、相変わらずしこしこはかないものを書いています。もうそろそろや

たので、その足で眼科の診察を受けてみたのです。そこでいろいろ検査していただいた結果、黄斑変性症というのは誤りで、「網膜前線維症」と診断されました。網膜の前面に薄い膜が出来て、それが邪魔して見えにくくなっているということです。

「これは一種の老化現象で、手術して膜をとり除けば良くなります。治療は早い方がいいですよ」と言われ、手術と聞いてまた怖くなり、「手術ってどのようにするのですか」「眼に針を刺して膜を吸い取るのです」「危険性は無いのですか」「この病院で同様の手術を毎年七十件くらいやっているの心配いりません。十日間ほど入院が必要です」―医師とこんな会話を重ねて、手術を受ける決心をした次第でした。

「案ずるよりも産むが易し」痛くも痒くもなく、簡単に手術も終わりました。やはり病院や医師は選ぶべきだと思います。ありがとうございました。

もう一つ。歯の治療についてですが、三十数年前、大切な大臼歯一本がダメになり、ブリッジの治療をしたのですが、食事

の度にブリッジの間に食べ物が挟まり、長年不快な思いをしておりました。

ところが三年前に、ブリッジの支えをしている両端の臼歯がダメになり、抜く破目になりました。かかりつけの医師の言うには、「最近インプラントの治療をする人がいるが、あれは止めたほうがいい。うまくいかなかったら大変なことになる」と、入れ歯を勧められたので、下の奥歯三本の入れ歯を三十万円ほどかけて作りました。

ところが、入れ歯を入れてみると、口の中が不快で、しかも食事中に入れ歯がはずれたりして、「死ぬまでこの入れ歯をして食事するのはとても堪えられない」と、一週間ほどでギブアップしてしまいました。

たまたま、家内が通っていた歯科医がインプラントの専門医で、家内がインプラント一本治療したところ、とても具合がいいというので、早速その医師のところを尋ね、これまでの経緯を話したところ、「あなたの歯茎はしっかりしているので大丈夫です。インプラント開発初期の頃は、金属と骨と不適合が生じて失敗した例も見られ

たが、今では新しい金属が開発されたので全く心配はいらない」とのことで、早速治療を受けることにしました。二ヶ月間に五回ほど通院しただけで完全な歯が揃いました。若い頃の自分の歯が戻ったような気がしました。三十数年間ブリッジで不自由したのは何だったんだらうと。治療代は百四十万円ほどかかりましたが、金には代えられない幸せを貰いました。

医師といえど誰でも医学の専門家と思いがちだし、かかりつけの医師ともなればなおさら信頼してしまいます。でも、病院により医師によりレベルはピンからキリまで。病院選びの大切さを思い知らされております。

前置きをこんなに長々と書いたのも、『あとがき』に「不遜な医師にかかって危うく命を落としかけた。このいきさつは次号で詳細に語ってみたい」とあったので、私が最近体験した例をお知らせした次第です。次号で貴兄の強烈な「世迷い言」を期待しております。

<『琅』への手紙>

応募要領に「他に応募していない自作

の句に限る」とされていますが、一字違いの句でも内容や評価が大きく異なるのが俳句です。他に応募した句の一字違いの句を応募することは、この応募要件に合うのか合わないのか疑問が湧きます。

模倣句はともかく、類句、類想句、本句取りなどはどこまで許されるのか、添削していたいただいた句を自作の句としていいか、著作権との関係はどうなのか。―このような論議は、既に昔からなされているはずでしょうし、ルールも出来ているでしょうから、知らないのは私のようなド素人くらいかも知れませんが、ぜひ教えていただきたいと思えます。

猛暑が続いた夏でしたが、秋の彼岸境に寒波が襲来してきました。秋らしい秋を見ないまま一足跳びに冬に突入した感じですよ。いまふと、居酒屋などに掛かっている「春夏秋冬二升五合」という言葉を思い出しました。まさにこの文字のとおり気象だと妙に納得したのですが、でもこんなに不況の世の中、「商い」が「益々繁盛」とはいかないことは辛いことですね。

と思います。病院も我々の子供の頃の病院とはすべて様変わりです。それに比べて心理学はどうか。私が仕事上関係した心理学やカウンセリング技法をみると、半世紀前の我々の学生時代に学んだことと比べてあまり進歩していないような気がしてなりません。そう思うのは私の勉強不足か認識不足のせいでしょうか。

心理学が他の学問からアブローチされ、〇〇心理学と称して学際的研究は大いに進み、裾野は広がってきているとは思いますが、旧来の心理学が、その後どれだけ深化、発展してきたかが気になります。理工系と違って文系に近い心理学に、日進月歩という大きな変革を求めるのは無理な話でしょうが―。

こんなことを考えていたところ、江川玫成氏の『新しい心理学の流れ―進化心理学の出現と今後の課題』を目にすることができました。専門的で難しい内容でしたが、「進化心理学」という言葉に、心理学の新しい息吹きを感じました。

宗内数雄氏の随想『私の選句』は、い

十一月三日 小倉 修一郎

【お願い】
この『琅への手紙』は、毎号、たくさん頂戴しているお便りやコメントのなかから掲載させて頂いています。もっといろいろ掲載させて頂きたいのですが、編集者の視力が低下し、お手紙のパソコン入力、次第にままたまならず、先々号あたりから、切り取ってそのまま転載できる、電子メールとインターネット上の『琅』掲示板に寄せられたものに限定されるようになってきました。そこで、『琅』へのお便りやコメントは、今後、電子メールか『琅』掲示板にてお寄せくださいますなら、大変ありがたく、まことに勝手ながら、ここでお願ひ申し上げる次第です。

(編集人)